

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

ブラジル サンパウロ日本人学校

目次

- ① 学校の規模や子どもたちの実態
- ② 現地の新型コロナウイルス事情
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯
- ④ 実際の取り組み
- ⑤ 苦勞した（している）こと
- ⑥ 喜びを感じた（感じている）こと
- ⑦ 今後への課題

①学校の規模や子どもたちの実態

(1) サンパウロ日本人学校（以下：サ日校）の規模

- 1967年に児童数28名でスタートした本校は、今年度53年目を数える歴史と伝統を有する。
- 1974年に現在のカンポリンポの地に移転し、12万㎡の広大な敷地の中にある。
- 全盛期の1980年代当初には、児童生徒数900名を超える子どもたちが在籍。
- その後、児童生徒数は大きく減少し、ここ数年は150名～200名の規模。
- 令和2年度4月当初は157名の在籍予定であった。
- 小学部1年生が2クラス、小学部2年生～中学部各学年は1クラスの学級を編成。

(2) 子どもたちの実態

- 昨年度末に発生した新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、本校においてもブラジルを離れ、日本へ一時帰国する家庭が増加。
- 5月末現在、在籍児童生徒総数137名のうち、76名が二重在籍等の制度を活用して日本へ帰国。現在、サンパウロに残っている児童生徒数は61名。

② 現地の新型コロナウイルス事情

(1) 昨年度末の状況

- 中国から発生したとされる新型コロナウイルスは、中国国内、ヨーロッパ等で感染が拡大し、まさしくパンデミック状態となった。
- その波が、アメリカをはじめ世界各地へ広がっていくこととなるが、昨年度3月頃はブラジル国内においては、そう深刻な状況ではなかった。
- 世界各地の日本人学校等において卒業式等が中止となる中、本校においては、3月12日に卒業式、13日に修了式を予定どおりに実施することができた。
- しかし、やはり、感染の波は本国にもやって来た。
3月23日よりサンパウロ市当局から、現地の学校休校要請が発令され、同時に外出制限及び入国制限が続けざまに出される事態となった。
- 街の商店等の閉鎖が相次ぎ、賑やかだったサッカー場は仮設病院となっていた。

(2) 現在の状況

- 5月末のブラジル国内における新型コロナウイルスの感染状況は、まさに深刻。
- 世界保健機構（WHO）からの指摘でも、パンデミックの中心が中南米へと移行してきたとされている。
- 5月23日現在のブラジルにおける感染者数は35万人に迫り、ロシアの感染者数を上回り、アメリカに次いで世界第2位の感染国となった。
- 一日の死者は1,000 人を超え、特に貧困地区を中心に急速に感染が拡大。
- 南米最大の都市であるここサンパウロでは、サッカー場に仮設病院のベッドが敷き詰められ、死者の埋葬が追いつかない状況となっている。

③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければ いけなくなった経緯

(1) 学校が開けないという想定外の事態

- 昨年度末の計画では、本校は4月13日に新年度を開始する予定であった。
- しかし、新型コロナウイルスの世界的な蔓延が深刻化し、新規派遣教員の派遣見合わせが通知され、サンパウロ市においても学校休校及び外出制限措置が発令されている中、学校が開けないという事態に陥った。
- 教職員も学校に行けない状況となり、オンラインでの会議を通して、情報を共有し合い、学校を動かさなければならない事態となった。
- 学校はいつ始まるのか、という保護者の不安や戸惑いも聞こえてくる。
- 学校運営委員会とも協議を重ね、対応策を講じることとなった。
- そこで、4月3日付で「今後のサ日校の動き・方向性」を保護者に発出し、今年度始業式を4月23日に、入学式を4月24日にオンラインで実施することを通知することとなった。

④ 実際の取り組み

(1) 学校初オンライン始業式・入学式の挑戦

- 学校を始めるためには、まずは教科書の配付が必要だが、本校は子どもたちの居住区から遠く離れた場所に位置し、学校周辺は治安も悪化。
- そのため、学校の各学級に準備していた新しい教科書を、居住区内のホテル会議室を借り、三密を防ぐ形で保護者に配付することとなった。
- 久しぶりに保護者に会う機会となり、子どもたちの安否を確認するとともに現在の不安や学習相談に向き合うこともできた。
- しかし、児童生徒の半数は日本へ帰国しているので、教科書等についてはPDF版にしてデータ送信することで、授業準備の対応を図った。

- そのような中で、4月23日(木)の始業式の日を迎えた。本校は、昨年度から文部科学省委託事業「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（略称：A G 5）」に取り組み、遠隔授業の研究を進めてきた実績がある。そこで活用してきたオンライン会議システム（ZOOM）を駆使することで、新年度の学校をスタートすることができると考えた。
- 日本とブラジルの両国に在籍する137名の子どもたちへの「校長式辞＝始業宣言」「新担任発表」は、YouTubeによる限定配信により全体で実施した。各学年・学級ごとのクラスルームはZOOMで行い、サ日校の令和2年度が本格的に動き出した。
- 翌24日(金)もオンライン入学式を挙行し、校長式辞や来賓式辞、歓迎の言葉や新入生の言葉をYouTube で配信し、式の中の担任の呼名やクラスルームをZOOMにて実施した。新しい先生の呼ぶ名前に、パソコン画面越しに元気な返事をする子どもたち。それを温かい目で見守る保護者。そして希望をふくらませる教師。惜しみない拍手を贈る来賓の方々。世界を脅かすコロナ禍の中、137名全員揃っての新年度サンパウロ日本人学校の挑戦がここに始まった。

(2) オンライン授業への挑戦

- 昨年度の「A G 5」遠隔授業研究のノウハウが本校にはある。前研究主任のリードによりオンライン会議システム（ZOOM）を活用した授業構成の挑戦が始まり、手引き書・マニュアルの作成、職員会議や部会での検討、保護者・児童生徒への通信テスト等を経て、4月27日(月)よりサンパウロ日本人学校の「オンライン授業」がスタートした。
- 実施初段階にあたり、特に留意したことは「セキュリティ」の強化と「情報モラル」の浸透である。
- 本校は、児童生徒の約半数が日本に帰国していることから、ブラジルとの時差12時間を考慮し、日課の工夫を講じた。
- 日伯同時に授業を組むことができるよう、ブラジル時間の朝7時（日本時間の夜7時）に全職員の打ち合わせを行い、その後、各学年による朝の会、そして授業に入れるようにしたのである。

- ブラジル時間の午前中に「2時間の授業」＋「課題提供」から始め、少しずつ授業時間を増やし、技能教科や体育（エクササイズ）等も取り入れ、「1日4時間」＋「課題（自学）」の日課を位置づけている。
- オンライン授業を進めていく中で、いろいろな課題も見えてきた。「一方向に偏らない授業の構成の仕方」や「子どもの集中力の問題」、「学力が確実に身に付いているかの評価の問題」、そして「家庭学習の在り方の問題」などである。
- このような問題の解決においては、保護者の協力が不可欠である。そこで、授業の合間に各学年・学級ごとにオンライン「保護者会」を設定し、時には個別の質問タイム等を位置づけて、学校と家庭の連携により対応策を見出している。
- また、定期的な「A G 5 教員研修」や「各部会での協議・検討」も、オンライン授業のスキルアップに功を奏している。
- 双方向の構成やグループ討議も含めたオンライン授業の質の向上をめざしている。

⑤ 苦勞した（している）こと

（１）物理的な苦勞

- 本校は児童生徒や私たち教職員の居住区から遠いところに位置し、周囲の治安があまりよくない。
- また、外出制限令が続く中、教科書や教材等の持ち出しに大きな困難が生じていた。
- 何とか、学校警備員の協力を得ながら、新学年の教科書や学習に必要な教材・テスト等を学校から持ち出し、居住区内のホテル会議室を借りて保護者（児童・生徒）へ配付することができた。
- 日本への編入児童生徒の手続き等や学校運営委員会等の業務においても、学校に赴く必要があり、その都度、感染防止や身の安全に気を配りながら、慎重に行動しているところである。

(2) 精神的な苦勞

- ブラジル国内の感染拡大は、現在急速に進行している。感染のピークは、まだ先であると言われている。
- サ日校としても「学校再開」のロードマップを構想し、その糸口を見出そうとしているが、やはり先（ゴール）が見えないことに精神的な苦勞を強く感じている。

⑥ 喜びを感じた（感じている）こと

（１）オンライン授業を通したつながり

- 「子どもたちの元気な表情が見られて嬉しかったです」
 - ・・・オンライン授業後に届く先生方の声。長い学校休業と外出制限、また日本への帰国のため、会えなかった仲間たちとオンライン授業を通して出会えた喜びは、子どもたちにとっても、とても大きなものであった。
- サ日校に新しく編入してきた子どもたちも安心と喜びの表情を見せてくれている。また、その背後にいる保護者の方々もサ日校のオンライン授業に大きな期待と感謝の言葉を寄せてくれている。
- 学校運営委員会のバックアップも本校のオンライン授業の取り組みを支える大きな力である。
- コロナ禍の厳しい中ではあるが、オンライン授業を通した学校と家庭（子どもと保護者）、学校運営委員会（地域）の三位一体のつながりは、何ものにも代えがたい大きな喜びである。

（２）教職員の成長と「チーム・サンパウロ」

- 想定外の非常事態にあって、何よりも嬉しいのは、本校教職員・スタッフの強い絆である。
- 失ってしまった日常においても、教職員一人一人がスキルを磨き、全職員で協議・検討を重ね、学校を動かし、始業式や入学式をやり遂げてきた。
- そして、今力強くオンライン授業の挑戦を続けている。
- 在外という特殊で過酷な環境、ましてや、感染危機が広がる任国にあって、子どもたちのために同じ方向を向き、日々の取り組みに一生懸命に力を注ぐ「チーム・サンパウロ」の仲間たち。
- まさに、校歌に記されたように「サンパウロ日本人学校、ここにあり」である。

⑦ 今後への課題

(1) オンライン授業の課題

- 本校のオンライン授業も2か月目に入る。
- 授業のマンネリ化や子どもの集中力持続化の問題など見えてきた課題に立ち向かう努力と工夫が必要である。
- 特に学力の定着の度合い（評価）を看取る手立ては急務である。
- 一方的に与える授業から脱し、双方向の実りある学び合いの成果を引き出すためにも、今後「AG5教員研修」や「校内研修・部会」においても多くの示唆を見出し、子どものために互いに授業のスキルを高め合う「チーム・サンパウロ」でありたい。

(2) 学校としての課題

- 日本国内は緊急事態宣言が全面解除され、学校再開の見通しが整ってきた。
- しかし、新型コロナウイルス感染者急増のブラジルは、これからが感染拡大のピークだと言われている。
- 学校として、この先をどう読み解くか、学校再開に向けての大きな決断に迫られている。
- 新規派遣教員の着任時期も見えない中であるが、各種情報を収集し学校運営委員会、領事館、関係機関等とより一層連携を深めながら、光射す「夜明け」をしっかりと見つめていきたいと決意する。